

日中韓合同シンポジウム／ 合同教育研修プログラムに 参加して (2009年3月)

column 1

北陸大学薬学部准教授
鍛治 聡

関西空港から2時間半のフライトで、着陸間近のアナウンスで目覚めた視野に、雪と山々の稜線が織りなすあまりにも綺麗で荘厳な景色、氷河を連想させる谷という谷を埋め尽くす純白の雪また雪が飛び込んできました。一見の価値があります。しかしながら、体力勝負が必定となる冬期よりもむしろ避暑地として夏期の瀋陽で、などと思いを巡らすのは年のせいでしょうか。出迎えを受けての車窓から見る空港付近の風景は、しばし遠くの地平線をうかがうといった景色でしたが、あくまでも“しばし”で、高層ビルが建ち並び、ドイツ製の高級車が行き交う700万都市瀋陽が“まもなく”視野に入ってきます。

三大学合同シンポジウム・教育研修プログラムの会場である瀋陽薬科大学は市の中心部近くに位置し、コンピューターで宇宙から地球を望むグーグルアース・ソフトを用いると簡単に見つけ出すことができます。伺った話では、1学年1400名で薬剤学講座だけでも40名のスタッフで教育・研究を行っているそうです。当然のごとく、広大なキャンパスに多くの建物が存在しています。新学期の開始を間近にして、大きなカバンを抱え昼夜問わずキャンパスに入ってくる学生達で日に日に大学が活気づいていく様子がうかがえました。教育研修プログラムに参加した学生だけではないと思いますが、瀋陽薬科大学及び慶熙大学のいずれもの学生が、英語または日本語が堪能で中にはバイリンガルにとどまらず、トリリンガル、テトラリンガルに行き着こうかという学生も存在しました。さらに加えるならば、中国人学生並びに韓国人学生ともに、我が北陸大学学生に常に親切かつ丁寧であり、四六時中声を掛けてくれ仲間の輪に招き入れ、また本学学生も飛び込んでいっていました。まさしくコミュニケーションの実学の間場でありました。

シンポジウムでは、ホスト校の瀋陽薬科大学が4演題で慶熙大学と北陸大学が各々3演題、計10演題の発表が行われました。慶熙大学丁教授の「クロマメノキ由来成分の美白と美肌効果」、瀋陽薬科大学邱教授の「ハーブ成分の微生物からヒトにいたる種々の生物による代謝物検索」などに加え、本学高野助教の「日本におけるクリニカルパスの現状」、並びに本学鈴木助教の「ゲニピン誘導体の神経突起における構造活性相関」の発表に、学生を含め活発な質疑応答が行われました。研究内容についての質問はもちろんですが、「クリニカルパスを中国に導入するには」と質問してきた瀋陽薬科大学の学生の熱心さには頭の下がる思いでした。今夏の機会には本学学生の頑張りを大いに期待したいものですし、そうなるように努力したいと思います。

最後に、この合同シンポジウムのまとめ役とも言うべき慶熙大学丁教授は、「シンポジウムが契機となって三大学の共同研究がスタートすることが目的であり、共同研究を呼びかける研究発表を行って欲しい、また、教育プログラムに学生が参加し飛躍する契機となって欲しい」と繰り返されていました。実際に、丁教授を中心に、瀋陽薬科大学 Bi 教授、北陸大学村田教授とで共同研究が開始されます。将来先生のもとで留学したいと丁教授に申し込んだ学生が現れるに至って、成果が着実に現れていることを実感するとともに、本学もの思いを強くしました。「頑張ろうニッポン・北陸大学」は正直な思いです。皆さん、頑張りましょう。